

# 眞理について

齋藤武雄

## 一 緒 言

眞理とは何であるか、それを深く考えれば考える程益々その自明性が失われて行く。眞理への間は古來存在との関連において提起された。而して根源的には眞理は人間の存在の仕方によつて規定される。眞理は人間のもつ眞理であり、人間の眞理である。併しその人間の在り方は多様性をもつのであり、この人間存在の多様性から眞であること即ち眞理の多様性が生ずる。眞理は一義的自明なものとしてあるのではない。

かくて眞理の多様性は類型的に探求され得るであろう。即ち意識一般の眞理、現存在の眞理、<sup>ガイスト</sup>精神の眞理及び実存の眞理と言うように人間の在り方の多様性から眞理の類型を擱ることも可能であろう。併しかかる多様性の相対的考察のみではわれわれの理性は満足し切れないであろう。理性はあらゆる存在を結びつけ統一せんとするものだからである。理性は一つの眞理、絶対の眞理を求めてやまない。併し唯一絶対の眞理を客観的對象的に把握することは有限なわれわれ人間には不可能である。絶対的眞理への道は意識一般、現存在、精神と言う内在の立場を超えて超越者たる一者への哲学的信仰の下に <sup>コミュニケーション</sup> 交通による実存の眞理を実現し、それが内的行為として内在のすべての立場を貫ぬ

き働きそれを限定して無限にそれを繰り返すこと以外には存しないであろう。かくして人間は全人として真であり得るであろう。

対立する真理概念の統一の研究は永遠の課題であると共に刻下の急務である。併し上述の如き全人としての真理の詳論は後日を期することにして、今はヤスパースを中心として真理の諸様式の考察をなそうと思う。

## 二 意識一般の真理

思惟の歴史を回顧するとき、最初には絶対的真理の主張が、次には眞実存在すべてへの懷疑が起り、両者と並んで仮象的真理の詭弁的に気儘な利用が控えていると言ふように動揺があるのである。(註一)我々はおかざる例を古代希臘の哲学に容易に見出しうるであろう。そしてソクラテス、プラトン、アリストテレスの努力が客観的真理の確立を目指してなされたことは言うまでもないであろう。そしてアリストテレスはピュタゴラス学派、エレア学派、ソクラテス、プラトンに於いて準備されたものの総合、体系化としての論理学の大成者となつたのである。(註二)

さて、アリストテレス以来の伝統的真理概念をハイデッガーは次の三つに於いて特徴付けている。

(一) 真理の「場所」(Ort)は言表(アウスマグ)表(アウスマグ)(判断)である。

(二) 真理の本質は判断とその対象(ゲゲンスタント)との一致 (Übereinstimmung) にある。

(三) 論理学の父、アリストテレスは真理をその根源的場所たる判断に帰属せしめそして「一致」と言う真理の定義をも通用せしめたのである。

又カントは「人々がそれを以つて論理学者たちを窮地に追い込むと思つてゐる古い有名な問題は……真理とは何ぞ

やの問題である。即ち真理は認識とその対象との一致であると云う真理の名の説明は此処で許容され前提されている。併し人々の知らんと欲するものは個々の認識の真理の一般的にして確實なる徴表(クリテリオン)(基準)は何であるかということである。<sup>(註三)</sup>と言つている。又「若しも真理が認識とその対象との一致にあるとするならば、それによつてこの対象は他の対象と区別されなければならぬ、何となれば認識が若し彼が関係せしめられている対象と一致しない時には、たとえ認識が他の諸対象によく当てはまることのできる何物かを含んでいたとしても、誤であるからである」<sup>(註四)</sup>とも言つてゐる。更に又彼は先験的弁証論の緒言に於いて「真理か假象(イデオロギイ)かと云うことは、直観される限りに於いての対象に存するのではなくて、思惟される限りに於ける対象に関する判断の中に存する」<sup>(註五)</sup>と言つてゐる。

かかる一致、合致等の真理の特性は一般的であり、形式的である。それは形式論理学の立場に於ける言表の真理、判断の真理であつて真理の消極的条件である。これは消極的とは言いながら対象認識の不可欠的条件であつて、形式的なものとして意識一般の真理の一樣態である。

然しながらカントの求めた真理は、かくの如き、内容と無関係な真理ではなく、即ち思惟一般の形式に関するのみのもではなかつた。それはかかる真理の消極的標準ではなく、「如何にして先天的綜合判断は可能なりや」と言う間に答える所の先験的分析論としての「真理の論理学」<sup>(註六)</sup>(eine Logik der Wahrheit)に於ける客観性であつたのである。客観性たる真理は内容に関して、対象の認識が普遍性と必然性をもつ所に存立するのである。

以上に於いて見た普遍妥当の真理は、それが形式的にせよ先験的にせよ、人間存在の一樣態たる「意識一般」(Bewußtsein überhaupt)の地平に於いて存立するものである。かかる地平は諸科学の空間とも言うべきものであり、同時にそれは言表可能性に於いてあらゆるものを我々に対して明白化する空間である。即ち意識一般という普遍性と必然性とを本質とする人間存在の一樣態がかかる地平乃至空間を開示するのである。この地平に於いて客観的世界が

成立ち、客体的真理が可能となる。

「意識一般の真理は強制的正当性として認められる」と言われる如く、一般的なそして一切を拘束する必然の正しさである。又「それはそれ自身によつて存し、一つの他者——これに対してそれが手段である如き——から妥当するのではない。それは明証性 (Evidenz) に於いて自己を確証する」ものであり、この真理は悟性の明証以外に妥当の根拠を有たないものである。更に「意識一般として、単なる思惟の代替可能な一点が発言する。それは思惟一般として

(註八)

あり、この現存在 (Dasein) として或は実存 (Existenz) の自己存在としてあるのではない。この場合の伝達 (Mitteilung) は一般者に訴えながら、諸の根拠により生起する。それは正しい妥当と強制するものとの形式を探すのである」。

(註九)

それは思惟一般として普遍的な自我が、そしてそれ故自己保持と自己拡張とを事とする実践的な現存在でない理論的自我が、更に単独者として自己存在に関心し本来の自己たらしとするかけがえない実存でない所の代替可能な自我が発言するのであり、その伝達は普遍的な根拠によつてのみなされ強制的な妥当の形式を求めつつ行われるのである。

以上に於いて我々の見た意識一般の真理は判断の真理、認識の真理、悟性の真理等として性格付けるところの客観的真理の可能根拠である。そして客観的真理は人間が主観的相対的意識に於いてでなく、普遍必然の意識に於いて存在を思惟する時に、意識一般の地平に於いて発見される科学的真理である。かかる真理に対して、人間存在の他の様態たる、現存在、精神 (Geist)、実存の真理が他のものとして存する。意識一般の真理を唯一絶対の真理とすることも、夫々の個別科学の真理内容を絶対化して一の世界観とすることも、無制約者乃至超越的存在そのものを意識一般の真理で以つて規定せんとすることもすべて越権でありそして不可能である。又「科学的認識は人生に対して何等の目標も立て得ない」のである。(註一〇)

- (一) Vgl. Jaspers, Existenzphilosophie, S. 28. (11) Heidegger, Sein und Zeit, S. 214.  
 (三) Kant, Kritik der reinen Vernunft, B. S. 82. (四) a. a. O. S. 83.  
 (五) a. a. O. S. 350. (六) a. a. O. S. 87.  
 (七) Jaspers, Existenzphilosophie, S. 31. (八) a. a. O. S. 32.  
 (九) a. a. O. (10) Jaspers, Nietzsche, S. 153.

### 三 現存在の真理

現存在 (Dasein) とここで言うものは「始源と終末とをもち、その環境世界の中で勞苦し闘争し、或は倦怠し、屈服し享樂し苦惱し、不安や希望をもつ」ところのもの<sup>(註一)</sup>とヤスパースが言う意味の私である包括者 (das Umgreifende) の一様態である。現存在とは言わば日常性に於ける人間の存在の仕方であり、自然的態度を以つて生きるものである。それは所謂生 (Leben) の立場であり、ディルタイが世界觀の類型に於いて「自然主義」と言つた生の態度である。<sup>(註二)</sup>この生は実践的、実用的、經驗的、相對的等の性格をもつ。かかる生の態度即ち私であり又我々である存在者の存在の様態から世界がそれに相応するものとして開かれている。即ちかかる生の地平に於いて世界が存在するものとして我々に対して存在する。現存在は超越を知らない。それはハイデッガーの言う Man (日常的自己) の立場であり、実存から見れば非真理であり、平板であり、頹落である。併し現存在はそれとして自らの真理をもつてゐる。

現存在にとつては現存在(生)を促進するもの、利益するものが眞実なものであり、それを害し制限し麻痺させるもの

のが非真理である。現存在は自らの幸福を欲し、その環境世界を形成し、そこで産出される満足が真実である。現存在は真理を自己の合目的態度として把握する。現存在は自己を保持し且つ自己を拡張しようと欲するものであるが、その自己保持、自己拡張の目的に適合するものが真理であり、継続的な満足を促進するものが真理であり、適度の自己表現と無意識に対して適度の意識が真実である。「現存在の知識並に意欲としては真理は普遍妥当性も強制的確実性をもたない」<sup>(註三)</sup>ものであり、「それは実用主義の真理概念である」<sup>(註四)</sup>即ちそれは変化する相対的真理である。「現存在の真理は現存在保持並びに現存在拡張の機能である。それは実践に於ける有用性によつて自らを確証する」<sup>(註五)</sup>一人間は現存在として目的に自己の為に無限に関心する生が發言するが、この生はすべてのものを固有の現存在を促進する為の制約の下に置き、ただこの意味でのみ共感的或は反感的に感じ、この関心に於いて社会を契約するのである」<sup>(註六)</sup>ここでは伝達は闘争となるか或は同一関心の表現となる。そして敵性に対しては詐術を使用するし、重要なことは言われたことの現存在的効果であつて、それは説得し暗示し激励し落胆させようと欲する。かくの如き伝達、交通(交際)、言説(語る)ことは実存の立場からみれば非真理であり、超克さるべきものでありハイデガクの言う「空談」、「好奇心」、「曖昧性」<sup>(註七)</sup>の支配する現象である。併し、日常の実践的主体としての現存在にとつてはそれは真理である。

実用主義 (Pragmatism) と云う術語はギリシヤ語の行為乃至行動を意味する プラグマ (Praxis) から由来したものであり、それから我々の実践(實際)及び実践的(實際的)と云う言葉が生ずるのであり、プラグマティズムと云う術語はチャールレス・ピアースによつて一八七八年に哲学に導入されたとジェームズは言う。<sup>(註七)</sup>かく実用主義は行動的実践的な人間存在を人間の本質として把握する。そして又デューイに於いても見ることができるよう生物進化の原理と社会的人間の原理とがその根本をなすことも改めて説くまでもないであろう。併し総じてプラグマティズムは広き自由な交通 (communication)、習慣の變化、旧習の改善、共同利害の觀念による社会制御 (social control) を

(註八) 説き、概念乃至原理の固定化を斥けて不断の改造を説く進歩的長所をもつが、その立場は日常的生の立場である。そしてその真理観は以上の如き意味での行動的人間生活の道具 (instrument) としての知識の実際的効用に真偽決定の標準を置く見方である。真理を社会的に実践的に進歩的にみるが、実用主義は超越を知らない。

現存在の真理は相対的であり、生の歓喜と共に喪失の苦痛がある。得ては喜び失つてはなげく、現存在の不満足、反復の退屈さ、挫折に於ける驚愕は免れ得ない。相対的有限的現実に安んじようとしても、その生の抛り所は究極に於いて無いのである。生死ある人間は如何に社会状態が改善充実してもそのみでは安心し得ない。日常的生の立場では主体性の確立即ち決意性をもつての自己存在の確立、超越的なるものに於いての安心が獲得され得ない。その求める幸福の客観性も保証されないのである。

註

- (一) Jaspers, Existenzphilosophie, S. 16. 又 Dasein と云ふのはハイデッガーが世界—内—存在としての人間を Dasein と云ふのは同義ではなす。それはハイデッガーの言う日常性に於ける Dasein とみてよかろう。
- (二) Vgl. Ditchey, Gesammelte Schriften, Bd. VIII, S. 100 ff. (Die Typen der Weltanschauung und ihre Ausbildung in den metaphysischen Systemen, III Der Naturalismus.)
- (三) Jaspers, Existenzphilosophie, S. 29. (四) a. a. O. S. 30.
- (五) a. a. O. S. 31. (六) a. a. O. S. 32.
- (七) William James, Pragmatism, p. 46.
- (八) Cf. John Dewey, Democracy and Education, Chapter VII. The Democratic Conception in Education.

#### 四 精神の真理

意識一般と經驗的現存在と並んであり、又それらを統一するものが精神 (Geist) である。精神は意識一般と云う悟性の立場を超えたカントの理性を更に客観化し、絶対化して見られ得るような全体である。理性は統一の機能であるが「理性統一は可能的經驗の統一ではない」<sup>(註一)</sup>もので、それは經驗と直接に関係せず、「純粹理性はただ悟性とその判断とに関係する」<sup>(註二)</sup>のみである。それ故カントは「悟性概念からつくられた經驗の可能性をこえるところの概念はイデア (Idea) 又は理性概念という」<sup>(註三)</sup>のである。精神の立場はデイルタイの言う「客観的觀念論」の立場である。それは古くはクセノファーンネス、ヘラクレイトス、パルメニデス更にストア学派から近世のスピノーザ、ライブニッツ、ヘーゲルに至る汎神論的立場である。それは「全体の中に部分を総観する」<sup>(註四)</sup>静観的態度であつて、「万有が永遠の規則性を有すると云う意識」<sup>(註五)</sup>によつて貫かれる。それは美的、調和的、決定論的、連続観的態度の生であり、この生からそれに対応する世界観が生ずる。

精神は理念を求め、そして立てる。理性の理念は經驗的客観世界を超えたものであり、その客観性の制約 (可能ならしめるもの) を根源に於いて規定しそれと関係する。理念は、經驗的对象を認識するように客観的に知られ得るものではないが、そしてそれは方法的体系性としてその思惟に關連をもたらずものであるが、やはり對象的なものである。それは超越的全体者として對象的に必然的統一として思惟されるものである。そのことはカントが次の如く考へることからも知られうるであらう。即ちカントは經驗哲学 (empirische Philosophie) に対して、先天的原理のみから説明する純粹哲学 (reine Philosophie) を形式的な論理学と悟性の特定の對象に關する形而上学とに二分し、更に



形而上学を自然の形而上学 (Metaphysik der Natur) と道德の形而上学 (Metaphysik der Sitten) とに分けて考  
えて<sup>(註六)</sup>。理念の学は形而上学であり、それは經驗的認識の客観性とは異なるものであるが、やはり对象的に思惟され  
るのである。

ヤスパースは言う、「精神は存在の理解に於いて諸の全体性の理念に従うが、これらの理念は譬喩的に精神の眼前  
に立ち、衝動としてそれを動かし、方法的体系性としてその思惟に関連をもたらずのである。真実であるのは全体性  
を惹起するものである<sup>(註七)</sup>」と。更に彼は、「精神の真理は自己開明的な、又自己完結的な全体に所属することによつて  
存する<sup>(註八)</sup>」と言う。かくの如く完結せる全体性としての理念に生きることが精神の真理である。精神の真理は悟性の  
明証性に対しては普遍妥当的ではない。それは悟性の範疇を以つては客観的に對象化することはできないものであ  
る。それは悟性的對象的に知られ得ない全体者の確信であると言ふべきであろう。ヤスパースは「精神の真理は確信  
(Überzeugung) である<sup>(註九)</sup>」という。即ち理念の全体性が現存在や、意識一般によつて思惟されたものによつて真理と  
して現実<sup>(註一〇)</sup>に於いて証明される限り、精神の真理が自己を確証する所の確信が精神の真理である。

精神の真理は完結的理念の全体性を確信することと規定される。そして精神は全体的理念によつて貫かれる。即  
ち精神は理念によつて感じ意志し行動し考へ語るのである。その間の消息はヤスパースの次の言葉によつてうかがわ  
れうるであろう。即ち「精神として、具体的な、自己完結的な全体存在の雰囲気 (Atmosphäre) が発言し、発言者  
もその理解者もこの全体存在に所属しているのである。この伝達は——絶えず全体者の意味に束縛されながら——理  
念の導きによつて、言われる事を選択、強調、関係性に於いて行われるのである<sup>(註一〇)</sup>」と。包括者の一様態としての精  
神は「全体者の内での深き満足と、絶えず未完成であることの煩悶がある。両者に対立して調和に不満足なことと、  
又一方諸々の全体性の破壊に面して途方に暮れることが生じてくる<sup>(註一一)</sup>」のである。精神は理念の全体性に結局満足し切

れるものではない。調和的な世界の観方が不調和、矛盾に直面することによつて不安と当惑に陥るのである。完結せる理念の下では自由は窒息する。精神は現存在と意識一般とに比して一段高い人間存在の様態でありながら、そして又一方には悟性認識を超えてそれをつつみ、それに体系性を附与するものであり、他方実践的現存在の生活に規制原理を提供する所の所謂形而上学的なもの(超越的なもの)であるが、未だこれも人間の内在の立場である。それは真の超越を知らない。真の超越は実存の生起であり、実存が他者としての超越者と関係するにせよしないにせよ、それは理念の確信に止るものではなく、主体の深化、自己超克、非性乃至否定性による動性により上述の現存在、意識一般、精神のすべての立場の限界につき当り、それらのすべての立場の突破をなすものである。

註

- (一) Kant, Kritik der reinen Vernunft, B. S. 363
- (二) a. a. O.
- (三) a. a. O. S. 377.
- (四) Diltney, Gesammelte Schriften, Bd. VIII. S. 115.
- (五) a. a. O. S. 116.
- (六) Vgl. Kant, Grundlegung zur Metaphysik der Sitten, Vorrede.
- (七) Jaspers, Existenzphilosophie, S. 30.
- (八) a. a. O.
- (九) a. a. O. S. 32.
- (一〇) a. a. O. S. 33.
- (一一) a. a. O.

五 実存の真理

ヤスパースに於いては現存在、意識一般、精神は私であり我々である包括者の内在 (Immanenz) としての様態 (Weise) であり、これらの内在たる私にとつて対象となるものが世界 (Welt) であるが、この内在を超越する

(transzendieren)ものが私としての実存(Existenz)であり、実存が関係するものが超越者(Transzendenz)乃至神性(Gottheit)である。そして内在から超越への関係は連続の関係ではなくて飛躍(Sprung)である。<sup>(註一)</sup> 実存は現存在、意識一般、精神の絶対化の不可能を自覚し、その限界に突当り、かかる世界現存在に満足し切れず安んじ得ず、かかる内在の突破をなすものである。実存はかくの如く内在乃至世界の否定を本質とするものであり、実存も超越者も共に対象化され得ぬものである。内在の立場に於ける人間は未だ可能的実存に止るものであり、それが超越の現実に於いて現実的実存となる。デイルタイの世界観に於ける三類型の夫々の生の態度も内在的なるものであり、存在論(Ontologie)が実存存在論として単独者(Einzelse)を取扱うにしてもそれを対象化し客観としてみるものは実存開明ではない。「実存開明は存在論ではない」と言われる所以である。

然らば存在論を企てるハイデッガーの立場は実存の哲学と言い得ないであろうか。否、それも一種の実存開明である。彼は世界―内―存在としての人間たる現存在(Dasein)の本質を実存として居り、<sup>(註三)</sup>「凡ゆる他の存在論がそこからはじめて發生しうる所の基礎的存在論(Fundamentalontologie)は現存在の実存論的分析論(existenziale Analytik)に求められなければならない」とし、<sup>(註四)</sup>「哲学の根本主題たる存在(Sein)は存在者(Selendes)の類では決してない、……存在と存在構造とは凡ゆる存在者並びに存在者の凡ゆる可能な存在する限定を超えている。存在は超越そのものである。(Sein ist transcendence schlechthin)……超越としての存在のあらゆる開示は超越論的<sup>(註五)</sup>認識である。現象学的真理(存在の開示性)は超越的真理(veritas transcendentalis)である」とする。かくの如く彼の基礎的存在論も人間の理念を対象的に樹立する哲学的人間学ではなく、即ち存在的な(Ontisch)学的探究ではなく、超越的な可能性(可能にすること)を問うもの、即ち対象化し得ぬものの探究であつた。それは「人間学、心理学及び生理学からの現存在分析の区別」<sup>(註六)</sup>に於いて、又マックス・シェーラーの哲学的人間学の試みを批評

しつづ「哲學的人間學の理念」<sup>(註七)</sup>に於いて、ハイデッガー自らの立場を明かにし、「哲學的人間學の理念はただに充分

に規定されていらないのみでなく、哲學全体に於けるその機能は明瞭にされず又決定されてい<sup>(註八)</sup>ない」として人間學の

形而上學的基礎付けの必要を論じている。そしてハイデッガーの現存在の存在は関心(Sorge)であり、それはその

存在論的意味たる時間性(Zeitlichkeit)の地平に於いて可能にされる。そして時間性は現存在を照らす光(Licht)

であり、関心の実存論的根拠である。関心も時間性も対象的なものではない。彼の存在は先天的(a priori)なもの

であり、非実在的(物在性 Vorhandenheit に於いてあるものでないこと)である。それ故、ハイデッガーの基礎的

存在論は対象的存在の存在論ではなくて、それは主體的実存の存在論である。この点ヤスバースと類似しているが、

ヤスバースの実存は超越者に関係するものであるのに対して、ハイデッガーの実存は自己を超えた他者としての超越

者に面するものではない。それは無(Nichts)に直面すると言つても、その無は実存を超えた他者ではない。それは

時間性の性格たる非性(Nichtigkeit)に基づく現象(物的現象の意味ではない)であつて、それは対象的なものでは

なく、実存の動性、否定性に基<sup>(註九)</sup>づくものに他ならない。これに反してヤスバースは「実存は自己自身へと関係し、そ

してその際超越者へと関係するところの自己存在であり、それはこの超越者によつて自己を贈与されたことを知り、

その超越者に基礎付けられているのである」<sup>(註一〇)</sup>と言ふ。ヤスバースに於いては実存の根拠は超越者である。

ハイデッガーに於いては「実存の真理」は最も根源的なそして最も本来的な開示性(Erschlossenheit)であつた。<sup>(註一一)</sup>

開示性は根源的真理であり、この開示性に基<sup>(註一二)</sup>づいて世界内部的存在者の発見性が可能となる。伝統的真理概念たる

「一致」と云ふことは現存在の開示性から由来する。そして「現存在は等根源的に真理と非真理に於いてある」<sup>(註一三)</sup>。本来

性(Eigentlichkeit)は真理であり、非本来性(Uneigentlichkeit)は非真理である。本来的開示性は決意性(Entschlossenheit)であり、最も本来的な最も根源的な真理は決意性である。これが実存の真理である。そしてこれは本

来的時間性に基ずく。かくの如きハイデッガーの真理觀の説明はここでは紙面の關係上割愛する。そして以下に於いてヤスバースに於ける実存の真理を簡略に述べるに止める。

「実存は自身に対して意識一般、現存在、精神として現存し、それはこれらの諸様態を自己に対立させ得るのである。しかし実存自身は自己をそれ自身の外に置くことはできないし、自己を知つたり、そして同時に知られたものであつたりすることはできないのである」<sup>(註一三)</sup>と云われるように実存は内在として現象し、且つそれを超えて自己にそれを対立

せしめ得る自覺的存在であり、自ら自身は対象化できない主体である。実存の本質は形象も可視性ももない。「実存は真理を信仰 (Glaube) に於いて経験する。実用的真理の如何なる確証的な現存在の効果も、悟性意識の如何なる証明可能な確實性も、精神の如何なる包藏的總体性も私をも早や受け入れない時、その時こそ私は真理に來り臨んでおり、この真理に於いて私はあらゆる世界内在 (Weltimmanenz) を突破し (durchbrechen)」、これによつて初めて超越者の経験から世界へと還歸し、今や世界の内と外と同時に存し、今にして初めて私自身であるのである。実存の真理は、本来的現実意識として自己を確証する」<sup>(註一四)</sup>と云われる。実存は世界内在を突破することによつて超越者を経験するのであるが、かかる超越は例外 (Ausnahme) と云う実存の性格をもつている人間の存在様態によつてなされる。

「例外であることは一般者のあらゆる様態を事実に突破することである」<sup>(註一五)</sup>のであつて、例外は誰かと云うと、ソクラテスの如き特殊の人物に於けるそれであるのみでなく、あらゆる可能的実存たる人間に遍在するものである。例外は落伍者、没落者、單なる変りものの意味ではない。それは一般者の限界を身を以つて自覺し、それに直面する自己である。個別者、各自性、代替不可能性等の特質をもち自己の本来性から世界の根源にせまらんとするものはすべて例外者の性格をもつ。超越者たる一者 (das Eine) へと超越する道は例外と共に權威 (Autorität) を通じてたどられる。權威は包括者の様態を貫き結合するところの一般者且全体者として現象するところの眞実なるものの統一であ

(註一六) 權威は宗教的信仰に於いてみる事ができるように超越者への信仰に関するものとして、世界現存在を超越せるものであるが、それは固定を欲する故、非真理に陥ることが多い。併し、実存は例外と權威とを通じて、超越者たる一者に向つて、諸の真理の緊張を通じて新しく超越的現実に向つて世界現存在の突破をなさんとするものである。例外と權威とは極端に対立するものであるが、共に超越者を確信し、未完成であり、運動であり、自己を止揚しつづけ、その間それらの瞬間に於いてその都度かの一なる真実として緊張から生まれくるものであり、歴史的であり、かけ替えのないものであり、模倣不可能であり、又反復不可能なものである。(註一七) 併し世界内在を突破し超越の経験へと向わしめるものは例外と權威とによるのみでは不充分である。哲学的思惟即ち実存的思惟は理性を以つてなされる。理性は哲学的真理の道である。「理性の根本的特色は統一への意志である。」(註一八) その統一とは何か。それは「理性は一者を求める」と云うことであり「理性とは……包括者のあらゆる様態の一体化を目指して押進むところのものである」、更に(註一九) 「理性はそれ故総合的な交通意志 (Kommunikationswille) である」という意味である。ヤスパースの理性は精神の立場に止るものでなく、実存がそれを担うものであり、実存の機能とも言うべきであろう。そして哲学的信仰を宗教的信仰と分つ所以のものも実存の理性性とでも言うべきところに存するであろう。理性は悟性の固定化を突破するものである。理性は「克服と結合との切望以外の何物でもない」と云われ、又「理性は——実存と同様に——一つの飛躍によつて存在者の封鎖的内在から外へ出ている」と言われる。(註二〇) 理性は実存に担われ、結合と否定の作用をもつが、かかる深きロゴスを担う実存の特質は一者たる超越者を信仰するところのパスにある。実存の真理は結局哲学的信仰である。

哲学的信仰は如何なる制度にも信条にも固定化されるべきでないところのものであつて、それは「個人的生活の実体」(註二四) であり、一切の対象的なものを超越する実存の交りを可能にするものである。

哲學的信仰は実存の真理である。併し存在への道たるこの真理は神祕的直覚によつて直ちに超越者の經驗を得ることとはできない。それはしかし認識の道によつても実践の道によつても超越者の經驗たる本来の現実には到達できないのである。かかる現実への超越は思惟自身の力では不可能である。「現実的なるものの重圧は難破する思惟によつて感得されるべきである」<sup>(註二五)</sup>。「現実是我々に対して歴史性として現象する」<sup>(註二六)</sup>のであるが、それは歴史學的<sup>ヒストリカル</sup>に時代の位置についての知識からこの時代の課題及びその中にあつての私の課題を演繹することを意味しない。「永遠の現実は無時間的に存立する他者として出会われるものでなく、又、時間の内に留るものとしてでもない。むしろ現実は一の移行(Ubergang)として我々に対して存在するのである」<sup>(註二七)</sup>。それは恒常的秩序形態も、現存在としての永続的形態ももたず、却つて難破(Scheitern)の形態を獲得する。世界現存在の現実の統一化・絶対化、歴史的形態の絶対化は非真理である。「統一はあらゆる内在的統一を超越することによつて現実そのものである」<sup>(註二八)</sup>と云われるのであり、超越者は經驗可能な世界存在ではなく「唯実存にとつてのみ聴取れるように話しかける」<sup>(註二九)</sup>ものであり、実存の深さ、力並びに範囲に従つてそれへの近接と遠隔の程度が生ずるのである。時間存在として私は有限性の言語を通してのみ超越者の話しかけをきくことができる。単なる内在には「忠実さの絶対性もなく、愛しながらの闘争に於ける成長の連続性もなく本来的現実の顕在もないのである」<sup>(註三〇)</sup>。

実存の深化なしには超越者の話しかけが聴きとられ得ない。そして実存は相互にかけ替へないものとして訴え合わなければならない。かかる実存の交通は愛しながらの闘争——権力の為ではなく公明性の為の——に於いて行われる。実存の交通<sup>ユニオン</sup>は現存在の交通とは次元を異にするところの、超越者を志向している実存同志の交りである。

現実の經驗はあらゆる現存在の挫折に際してその有限性の經驗の瞬間に生起する。かくして内在乃至現存在はすべて超越者との關係に於いてのみ超越者の暗号(Chiffre)として存在への通路となる。暗号は形而上学的対象性であつ

て、世界内在の対象性とは区別される。それは「第一言語」、「第二言語」及び「第三言語」と呼ばれるもので、超越者がそれを通してのみ我々に語りかけるものであつて、それは実存の絶対意識の対象性である。<sup>(註三一)</sup>

かくの如く実存は世界内在の突破である超越することによつて、本来的な超越の経験たる現実<sup>(註三二)</sup>に到達し、この超越者の経験から世界へ再び還帰し、現存在、意識一般、精神を超越者の光にて照らす本来的現実意識に於いてその真理を確認するのである。実存は内的行動の性格をもつものであるが、世界内在の突破即ち否定から、超越者の経験から世界への還帰と、否定と否定の連続に於いて実存の真理は自らを確認する。哲学的信仰が実存の真理であり、絶望がその非真理である。

註

- |       |  |      |   |
|-------|--|------|---|
| (一)   | Vgl. Jaspers, Existenzphilosophie, S. 16, 17.              | (I)  | Jaspers, Philosophie, II, S. 429 ff.      |
| (二)   | Vgl. Heidegger, Sein und Zeit, S. 231.                     | (II) | Heidegger, Sein und Zeit, S. 13.          |
| (五)   | a. a. O. S. 38.  | (K)  | Heidegger, Sein und Zeit, § 10, S. 45 ff. |
| (七)   | Heidegger, Kant und das Problem der Metaphysik, S. 199 ff. | (L)  | a. a. O. S. 202.                          |
| (九)   | Vgl. Heidegger, Sein und Zeit, S. 350, 351.                | (O)  | Jaspers, Existenzphilosophie, S. 17.      |
| (十一)  | Vgl. Heidegger, S. u. Z. S. 221.                           | (P)  | Heidegger, S. u. Z. S. 223.               |
| (十三)  | Jaspers, Existenzphilosophie, S. 31.                       | (R)  | a. a. O. S. 32.                           |
| (十四)  | Vgl. a. a. O. S. 40 ff.                                    | (S)  | a. a. O. S. 37.                           |
| (十五)  | Vgl. a. a. O. S. 45.                                       | (T)  | a. a. O. S. 47.                           |
| (十六)  | a. a. O. S. 49.  | (U)  | a. a. O. S. 48.                           |
| (十七)  | a. a. O. S. 49.  | (V)  | a. a. O. S. 52.                           |
| (十八)  | a. a. O. S. 79.  | (W)  | a. a. O. S. 53.                           |
| (十九)  | a. a. O. S. 61.  | (X)  | a. a. O. S. 62.                           |
| (二十)  | a. a. O. S. 66.  | (Y)  | a. a. O. S. 62.                           |
| (二十一) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (Z)  | a. a. O. S. 62.                           |
| (二十二) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AA) | a. a. O. S. 62.                           |
| (二十三) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AB) | a. a. O. S. 62.                           |
| (二十四) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AC) | a. a. O. S. 62.                           |
| (二十五) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AD) | a. a. O. S. 62.                           |
| (二十六) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AE) | a. a. O. S. 62.                           |
| (二十七) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AF) | a. a. O. S. 62.                           |
| (二十八) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AG) | a. a. O. S. 62.                           |
| (二十九) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AH) | a. a. O. S. 62.                           |
| (三十)  | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AI) | a. a. O. S. 62.                           |
| (三十一) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AJ) | a. a. O. S. 62.                           |
| (三十二) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AK) | a. a. O. S. 62.                           |
| (三十三) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AL) | a. a. O. S. 62.                           |
| (三十四) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AM) | a. a. O. S. 62.                           |
| (三十五) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AN) | a. a. O. S. 62.                           |
| (三十六) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AO) | a. a. O. S. 62.                           |
| (三十七) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AP) | a. a. O. S. 62.                           |
| (三十八) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AQ) | a. a. O. S. 62.                           |
| (三十九) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AR) | a. a. O. S. 62.                           |
| (四十)  | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AS) | a. a. O. S. 62.                           |
| (四十一) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AT) | a. a. O. S. 62.                           |
| (四十二) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AU) | a. a. O. S. 62.                           |
| (四十三) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AV) | a. a. O. S. 62.                           |
| (四十四) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AW) | a. a. O. S. 62.                           |
| (四十五) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AX) | a. a. O. S. 62.                           |
| (四十六) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AY) | a. a. O. S. 62.                           |
| (四十七) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (AZ) | a. a. O. S. 62.                           |
| (四十八) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BA) | a. a. O. S. 62.                           |
| (四十九) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BB) | a. a. O. S. 62.                           |
| (五十)  | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BC) | a. a. O. S. 62.                           |
| (五十一) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BD) | a. a. O. S. 62.                           |
| (五十二) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BE) | a. a. O. S. 62.                           |
| (五十三) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BF) | a. a. O. S. 62.                           |
| (五十四) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BG) | a. a. O. S. 62.                           |
| (五十五) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BH) | a. a. O. S. 62.                           |
| (五十六) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BI) | a. a. O. S. 62.                           |
| (五十七) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BJ) | a. a. O. S. 62.                           |
| (五十八) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BK) | a. a. O. S. 62.                           |
| (五十九) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BL) | a. a. O. S. 62.                           |
| (六十)  | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BM) | a. a. O. S. 62.                           |
| (六十一) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BN) | a. a. O. S. 62.                           |
| (六十二) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BO) | a. a. O. S. 62.                           |
| (六十三) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BP) | a. a. O. S. 62.                           |
| (六十四) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BQ) | a. a. O. S. 62.                           |
| (六十五) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BR) | a. a. O. S. 62.                           |
| (六十六) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BS) | a. a. O. S. 62.                           |
| (六十七) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BT) | a. a. O. S. 62.                           |
| (六十八) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BU) | a. a. O. S. 62.                           |
| (六十九) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BV) | a. a. O. S. 62.                           |
| (七十)  | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BW) | a. a. O. S. 62.                           |
| (七十一) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BX) | a. a. O. S. 62.                           |
| (七十二) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BY) | a. a. O. S. 62.                           |
| (七十三) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (BZ) | a. a. O. S. 62.                           |
| (七十四) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CA) | a. a. O. S. 62.                           |
| (七十五) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CB) | a. a. O. S. 62.                           |
| (七十六) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CC) | a. a. O. S. 62.                           |
| (七十七) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CD) | a. a. O. S. 62.                           |
| (七十八) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CE) | a. a. O. S. 62.                           |
| (七十九) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CF) | a. a. O. S. 62.                           |
| (八十)  | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CG) | a. a. O. S. 62.                           |
| (八十一) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CH) | a. a. O. S. 62.                           |
| (八十二) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CI) | a. a. O. S. 62.                           |
| (八十三) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CJ) | a. a. O. S. 62.                           |
| (八十四) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CK) | a. a. O. S. 62.                           |
| (八十五) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CL) | a. a. O. S. 62.                           |
| (八十六) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CM) | a. a. O. S. 62.                           |
| (八十七) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CN) | a. a. O. S. 62.                           |
| (八十八) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CO) | a. a. O. S. 62.                           |
| (八十九) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CP) | a. a. O. S. 62.                           |
| (九十)  | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CQ) | a. a. O. S. 62.                           |
| (九十一) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CR) | a. a. O. S. 62.                           |
| (九十二) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CS) | a. a. O. S. 62.                           |
| (九十三) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CT) | a. a. O. S. 62.                           |
| (九十四) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CU) | a. a. O. S. 62.                           |
| (九十五) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CV) | a. a. O. S. 62.                           |
| (九十六) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CW) | a. a. O. S. 62.                           |
| (九十七) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CX) | a. a. O. S. 62.                           |
| (九十八) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CY) | a. a. O. S. 62.                           |
| (九十九) | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (CZ) | a. a. O. S. 62.                           |
| (一百)  | Vgl. Jaspers, Philosophie, III, S. 128 ff.                 | (DA) | a. a. O. S. 62.                           |



## 六 結 語

夫々の哲学はその立場に従つて夫々の真理観をもつ。私は真理概念を人間存在の諸様態から通観し、客体的真理の根源としての主体的真理を求めて論を進めて来た。主体の真理は所謂主観的真理ではなく、超越の真理であり、客体的真理の可能的制約である。

かかる真理はカント、ハイデッガー及びヤスパースによつて求められた。そして今や我々にとつては、経験的なものと先験的なもの、存在的なものと存在論的なもの、内在と超越等夫々に於いての対立の關係を如何に考ふべきか、特に人間存在の時間性に究極原理を見るハイデッガーの立場と超越者に最後の根拠をみるヤスパースの立場とは如何に綜合せらるべきかは重要な課題である。